『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』3：59-67 (2025)

三亜にいながら三亜にいない感覚

――中国海南島を再訪して

陳　昭

フィールドへの再訪は、人類学者の究極的なロマンであり特権でもあるが、幾分危険な旅である。過去に出会ったこと、出会っていなかったことへの希求は、往々にして、ただの落胆では済まない「過去」そのものへの懐疑に繋がる。やがて、自分自身にも向けられるその悶々とした不安は次の旅へと誘う麻薬となる。

一　旅立ち

2025 年 3 月 14 日、新居への引っ越しを済ませ、荷物がすべて解けていないまま、フィールドの旅に出た。広州、深セン、厦門、そして三亜。どの都市でもエッセイで書き切れないほど充実な経験だったが、この旅行記は三亜に絞る。

過去の調査では、デザインのプロジェクトを追いかける中で、海南島の三亜も訪れていた。しかし、当時は時間の制約もあり、三亜そのものへの関心は十分に展開せず、都市はあくまで器のような存在で、ただ通り抜けていた感覚であった。今回は一週間（20 日～28 日）の滞在しかなかったが、この場所をじっくり見てみようと意気込んでいた。

空港からホテルまでのタクシーの運転手は黒竜江省の出身であった。中国の最北端の漠河が位置する黒竜江省には、中国の長江流域で生まれ育った私はまだ行ったことがない。彼が言うには、中国の最南端に来たのは十数年前のことで、今やふるさとの料理よりは味付けがシンプルの「本地菜（*bendi cai*）」（地元料理）の方をよく食べているという。顔に当たる暖かい南国の風と、車内で響く北国の訛りが交ざりあい、織り出された「三亜にいながらどこか三亜にない」不思議な感覚が、この再訪の旅を貫くものとなった。

二　公園と都市の更新

「天涯海角（*tianya haijiao*）」（天地の果て）と呼ばれる三亜は、古くから士大夫の流刑地として知られていた。1980 年代後半から海岸沿いのリゾート開発に乗り出し、近年では市内全域の環境整備に力を入れている。環境にやさしいデザインを謳った公園が次々と建設され、その周囲には旧市街の取壊しに伴い新たな高層ビル群が誕生しつつある。

2015 年に訪れた時には生活廃水で悪臭が漂う水域だったのが、今は綺麗な湿地公園へと移り変わった。その周囲を囲む形で、立ち退き者のための居住区、高級マンション、ショッピングモール、オフィスビルが建ち並ぶ（写真 1、2）。その中でも、2024 年 10 月に開業したばかりの総合商業施設「大悦城」には高さ 208 メートルのタワービル（三亜国際貿易センター）がそびえたち、新しいランドマークとなっている（写真 3、4）。

写真 1　公園の歩道橋から見るビル群（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

写真 2　公園を取り囲む商業施設（2025 年 3 月 26 日、筆者撮影）

写真 3　公園の近くに佇む三亜一高いビル（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

写真 4　新しいランドマーク大悦城（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

建物の高さとともに上がったのは不動産の価格である。話を聞いた近くの不動産屋によれば、公園近辺は他の地域より家賃が高く、三亜市の新しい中心となりつつあるという。2021 年にオープンしたタワーマンション「公園 88 号」は、中国全体の不動産価格が下落傾向を続ける中、100 万円／平米（333 万円／坪）の高い平均単価を保っている（2025 年 1 月）。日本の不動産に容易に換算できるものではないが、単純比較で東京都世田谷区の三軒茶屋の地価に匹敵する水準だとは実に驚いた [1]。

三　「渡り鳥」の東北人

[1] 不動産屋の話を聞いているうちに、前に住んでいた池ノ上のことに思索が飛んだ。大学のキャンパスが近くにあり、再開発が最中の渋谷と下北沢の間に挟まれることで、近年土地の値上がりが著しい。相続税に直面し、家の世代交代がそのまま土地の売却につながるケースが増えている。5 年間住んでいた前居もその一つで、大家さんが高齢のため施設に入って 3 年後には不動産会社に売却され、取壊しが決まった。オーナーの自宅と同じ敷地に建つ賃貸アパートの前居は、古い木造でネズミの被害に何度も遭わされたが、隣人のイビキで互いの生存確認ができるある意味で暖かさもある物件だった。今後は 4 階建てのマンションになる予定であり、学生には到底無理な家賃になるのだろう。都市更新とは貧困層を追い出すトリックではないかと、退去間際に寂しく思っていた。東京から 1,800 キロメートルも離れた三亜の景観を目の当たりにして、今では複雑な気持ちを抱かずにはいられなかった。

公園の近くの不動産を回っている中、何回も同じ高層マンションの前を通っていると、門番のおじさんに「部屋探しに来たのか」と親切に声をかけられた。「借りるなら今だ」ということらしい。なぜかというと、三亜には毎年の 10 月から 4 月の間、寒い冬を避けて中国の東北や華北から多くの高齢者が訪れる。10 年前は金銭的余裕があれば投資も兼ねて三亜で不動産を購入する者も多かったが、近年の不動産事情を受けて今は賃貸で過ごす方が一般的になっている。空き部屋は 2 月の旧正月を境目に徐々に増加し、4 月～8 月（三亜の雨季）の間は家賃が遥かに安くなる。

越冬に訪れる人々を、地元住民は「候鳥（*houniao*）」（渡り鳥）と呼ぶ。確かに、スーパーやレストラン、図書館に至るまで、周りの東北人の多さに驚かされた。三亜には 1980 年代以降、東北からの移民が増え、1984 年の人口調査のデータではすでに黒竜江省出身者が一位であった。1990 年代以降は他の地域からの移民も増え始めたが、東北三省が現在も依然として上位を占めている。滞在中に出会った運転手やホテルのスタッフが全員東北出身者であった。それに加えて「渡り鳥」の存在は「三亜にいながらどこか三亜にいない」不思議な感覚に繋がった。

四　華やかさを競う舞台

熱帯サバンナ気候の三亜は夜が本番。19 時に湿地公園を訪れてみると、入り口の広場にはすでに様々なダンスの音楽が何重に響いていた。見た限りでは 60 代以上の中高年層が利用者の大半を占めており、ジョギングやストレッチなどで個別に体を動かしている人々もいるが、団体でダンスなどを楽しむ人々の存在がひときわ目立つ。街灯が照らす明るい場所で、それぞれ十数人～数十人のグループとなり、進行体操や新疆舞踊、ヤンコ踊り [2]、ストリートダンスなどが行われていた（写真 5、6）。中国の各地に見られる所謂「広場舞（*guangchang wu*）」（広場踊り）である。主に中高年女性が参加し、体操のような緩い動きを EDM 風の伴奏で踊るというのが、広場舞の一般的なイメージだが、新疆舞踊やヤンコ踊りに中高年男性も数多く参加していたことが新鮮的だった。

[2] ヤンコ踊りとは「秧歌（*yangge*）」呼ばれる民間舞踊であり、特に中国北部の農村部で盛んに行われている。色とりどりの扇子や長い布を手にして振りながら集団的に踊るのが特徴的である。

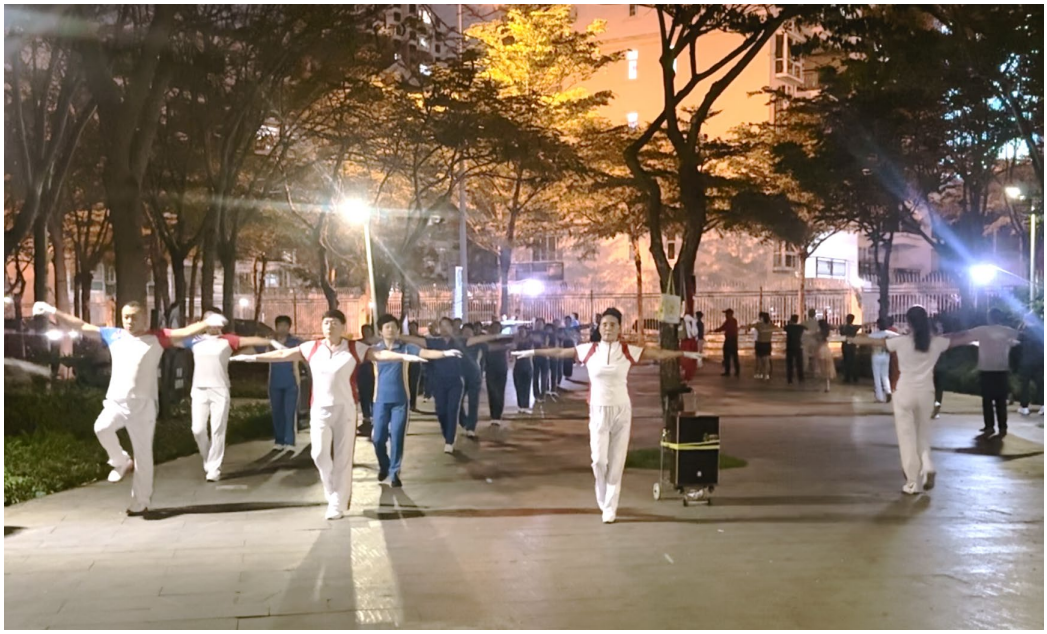

写真 5　進行体操を行う市民たち（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

写真 6　華やかな服装で登場するヤンコ踊りのグループ（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

話を聞いてみると、子供が三亜で働いている関係で移住してきた者もいるが、やはり「渡り鳥」の方が多かった。また同じ地域の出身が集まってグループを成しているようにも見えた。新疆舞踊の参加者は新疆からと口々に言い、ヤンコ踊りの参加者は東北と河南省出身の者が多い。故郷で親しんだ運動を「越冬地」の三亜に持ち込み、服装やメイクアップを揃え、踊りのステップとともに音楽の音量でせめぎ合いながら各自の場を広げている――夜の公園は華やかさを競う舞台のようだった。

五　異郷で同郷に出会う場

同じ地域出身同士の者がどのように知り合っているかは、旧市街の中心地にある白鷺公園の出来事が一つのヒントをくれた。20 年前に建てられた歴史のある公園で、海水と淡水が交ざる水辺にはマングローブ林が茂み、岸辺にはガジュマルの木が広がり、濃緑を飾る幹から垂れ下がる細長い根が森林のように包んでくる。その木陰の下の卓球コーナーは一日中賑わっていた（写真 7）。皆仲良く話を交わしている様子だった。スマホで映像を撮りながら立ち寄った私にも、対戦中の一人からやってみないかと誘いが来た。知り合いだと思い込んでいたペアはなんと今日たまたま初めて会ったという。一人は三亜に来て数十年の人で、もう一人は山東省から出張に来た人だった。以前出張に来た時たまたま公園を通りかかって卓球コーナーを知り、今回はラケットを持参してきたという。別の台でも初めての出会いの場面があり、常連のようなおばあさんが横に座って観戦しているおばさんに、「あなたも遼寧か、我々は同郷だよ、遼寧のどこなの？」と話しかける。こうして三亜の公園は「渡り鳥」たちが異郷で同郷に出会う場となっている [3]。

[3] 他方で親戚や知人など勢ぞろいで一緒に三亜に来るケースも多い。

写真 7　終日賑わう卓球コーナー（2025 年 3 月 26 日、筆者撮影）

六　また次の冬に

あっという間に滞在の時間が過ぎていった。もっと「地元の人」に出会いたかったと脳内のどこかで語気を強める声がする。あちこち訪問はしたが物足りなさを抱いてしまう自分がいる。せめて知識によってその欠落を満たそうと、数日間図書館に足を運んだ。借りたかった『三亜史（下）』が記録上は数冊の所蔵があるはずだが、どれも一ヶ月以上期限を超過したままの未返却。職員は記録を眺めながら、「これは「渡り鳥」が借りたかも、11 月や 12 月に借りられたものなので。そのまま持って帰ってしまったのかな…」。

諦めて地方文献室に移動。ここには三亜に関わる文献が所蔵され、貸し出し禁止だが、公開した政府資料など本屋さんでは扱わない本が揃っていている。窓際の席に座り、昨日からの続きで所蔵書物の目録を読む。斜めに 80 代のおじさんが座っている。一昨日も来ていたが、何らかの持病か、息が詰まるように咳き込んでいる。いつも『リー族略史』[4]（黎族簡史）を手にしてびっしりメモを取っていた。体調がすぐれないのか、しばらくすると

[4] 三亜には古くからリー族の人々が多く生活している。

いつもより早く退室した。職員さんは「あの爺さんは毎年、冬に来てるよ」と心配そうな顔をしている私を気にしたのかそう言った。

地元政府の退職した幹部か学校の元先生かと思い込んでいたお爺さんも「渡り鳥」だと聞いて驚いた。この新事実を受けとめてみると、彼が『リー族略史』を読むことの意味合いもガラリと変わった。彼も私も「三亜」を求めてここ資料室に来ていたのだ。「この場所をじっと見てみたい」。旅の欲望はいかに幻想上のものかと気づかされた。これは文化人類学の先人たちが教訓として残したものである。昔は三亜をゆっくり見ることができなかったことから、思わずどこにもない「三亜」を想像してしまっていたのだ。三亜とは、過去について書かれた文章にも、地元民か移民かの区別にも還元できない。何らかの形でここにいる人々が、この場所と関わりを持とうとする時、この場所を問おうとする時に現れてくるところに三亜はあるのではないか。こうして自覚した時、窓から風が柔らかく頬を撫でていた。

次は冬に来よう。その時、借りたかった本は返ってくるのだろうか。

謝辞：本調査は JSPS 科研費 23KJ1795 の助成を受けたものです。

（ちん・しょう　東京都立大学）